

「現代教養日本語実践新聞」第3号の発行に向けて

——取材日記 2

2019年（令和元年）11月22日（金） 第4時限目

「（情報メディア課へ）行きたいと思った」

そう感想を述べたのは、今回の取材で司会進行役を務めた学生の一人だ。

6号館8階にある情報システム部情報メディア課は、学生にとってそのような場所の1つになりそうだ。

今回の取材を担当したのは、金曜日4時限目の「日本語表現実践論」のクラス。情報システム部情報メディア課のパソコンヘルプデスク担当の小久保氏と田邊^{きとこ}郷子氏のお二人から様々なお話を伺った。普段我々がお世話になっている方々からお話を伺えるということで、始まる前からワクワクしていた。

取材開始は午後3時から。2時45分過ぎ、司会進行役の学生と情報システム部へお二人を迎えに行く。予定開始時間よりも少し早かったが、取材をスタートすることにした。

最初にお話くださったのは、小久保氏だ。熱のこもった言葉の数々は、きっとコンピュータに対する姿勢に重なる。「どンドン質問して」と学生と正面から向き合ってくださいだったので、学生も質問しやすかったようだ。パソコンのキーボードへのこだわりや、キーボードを速く打てるように練習することの大切さを学生に伝えた小久保氏。その率直な言葉が、学生を引きつけた。

次は、田邊^{きとこ}郷子氏だ。情報との向き合い方や、新しい時代の生き方について伺うことができた。何といても、田邊氏は本学法学部の卒業生で、学生にとっては先輩にあたる方だ。仕事の内容とその具体的な取り組みに加えて、先輩としてのエールも、学生の胸に響いたはずだ。田邊氏から教えていただいた肩のこりをほぐす体操も、よく効いている。もっとお話を伺いたいと心から思った。

お二人から感じたのは、「にじみ出る温かさ」と「仕事に対する謙虚さ」だ。やはり、人間としてどれだけ温かく、謙虚でいられるかが大切なのだ。それは、本学の創立者、高楠順次郎氏が掲げた言葉にも通じる。

学生が、それぞれの視点から、今回のお二人の言葉をどのように捉え、分析し、新聞記事としてまとめるのか、今から楽しみだ。次の取材も、失敗を恐れずに挑んでほしい。

「現代教養日本語実践新聞」の問い合わせ先

中央学院大学現代教養学部

高橋茂美

(takahashis@fla.cgu.ac.jp)